

『ゆずり葉』とともに(最終号)

校長室通信の発行は私自身の自己満足であることはわかっているつもりです。したがって、発行された通信が家庭に届いて読まれているかどうかは若い頃に比べてあまりこだわらないようになりました。

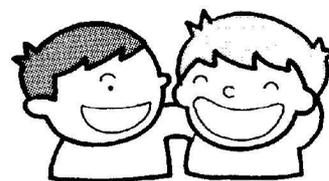
学級通信というものの最初の出会いは小学校6年生の時でした。担任の先生は今は故人となられたK先生でした。おそらく当時は30代前半だったのではないのでしょうか。版画指導が熱心で、学級通信もこまめに発行してくれました。あまり、物の整理が得意ではない自分がどういうわけか当時の学級通信『つどい』だけは物置の段ボールの中にずっととってありました。1年間で24号の発行部数がありました。

今と違い、当時はすべて手書きのガリ版摺りでした。もちろん文章だけではなくアクセントとしてのカットも随所に添えられていました。カットはカット集から写しとったものと子どもたちにそのために小さく切った紙を与えて描かせたものの両方を使っていました。子どもが描いたカットには必ずその下に小さく名前を書いてくれました。私たちは自分の描いたカットが次回の通信に採用されることを心待ちにし、いくつも稚拙なカットを描いて先生に出したものです。コピーなど機械どころか言葉さえなかった時代です。カット一つもすべてが手描きの時代でした。

コンピュータやコピー技術が発達した今日では毎日発行することも可能ですが、当時の年間24号の発行部数は超人的とも言える部数です。

私は教師になって1年目の夏休みに自宅にもどった時、偶然この『つどい』を発見しました。なつかしさもありましたが、それとは全く別の言葉に表せないような衝撃を受けたことを覚えています。

自分が教師でなかったらそれほどの感動はなかったかもしれません。しかし、自分が教師になって恩師の学級通信を見た時、なつかしさや感動より師の教育に対する情熱を真っ先に感じとることができました。



以来、私はこの24部の『つどい』を自分自身の教育のバイブルとして折に触れて開いてきました。そして、その度に教師としての新しい感動を発見してきました。

38年間の教師生活の中で、休むことなくその時の立場、その時の思いを通信の中に盛りこんでこれたのはK先生の『つどい』のおかげだと思っています。

読んでもらえたかどうか、共感をもってもらえたかどうか、発行者は知る必要はありません。ただ、その当時、自分が何を考え、何を生徒たちや保護者に訴えたかったのが自分の歴史の一コマとして残っていることがうれしいのです。校長の自己満足におつきあいいただきましてありがとうございました。

私の校長室通信『ゆずり葉』もこの号をもちまして永久にお別れです。長い間ありがとうございました。